

表51 1回の相談時間（複数回答）

	人 数(%)
15 分 未 満	106 (56.4)
15分 ~ 30分未満	77 (41.0)
30分 ~ 1時間未満	24 (12.8)
1時間~2時間未満	8 (4.3)
2 時 間 以 上	6 (3.2)
計	188 (100.0)

表52 集団指導への出席

	人 数(%)
出たことがある	89 (47.3)
出たことはない	99 (52.7)
計	188 (100.0)

表53 患者会・家族会への参加

	人 数(%)
参加したことあり	49 (26.1)
参加したことはない	139 (73.9)
計	188 (100.0)

あるため、平均以上に「糖尿病」の割合が高くなっている。

「相談回数」については、「10回以上」の人が51.6%を占めた。発病してからの期間が長い人の場合は、相談・指導の回数も多くなっている。

また、「相談時間」については、前記「病院看護職による保健相談に関する調査」で看護職が回答した時間に比べ、「15分以内」と感じている患者の割合が多い。筆者が面接調査を実施した時の印象では、患者、家族は実際に看護職と話している時間よりも短く感じて答える傾向があった。

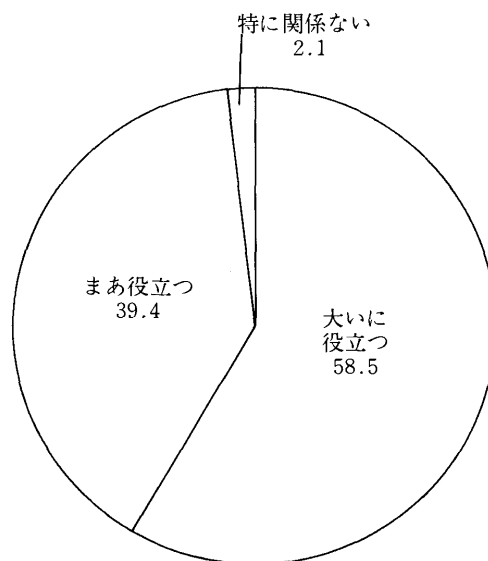
3 療養生活上どのような点で役立ったか

「相談部門の保健婦・看護婦に相談したり、指導を受けたりすることは、療養生活を送る上で役立ちますか。」という問に対して、「大いに役立つ」(58.5%)、
「まあ役立つ」(39.4%) とほとんどの患者が肯定的な回答であった(図6)。

「役立つ」と回答した者に「療養生活上、どのような点で役立ちましたか」と質問し、以下のような選択肢から選んでもらった。

- ① 知らなかったことや疑問に思っていたことがわかった。
- ② 自分で(家族が)行なう力がついてきた。
- ③ いつでも相談できるという安心感があった。
- ④ 気になること、不安、つらい気持ちなど聴いてくれ、気持ちが落ち着いた。
- ⑤ 医師と話しやすくなった。

図6 相談部門の保健婦・看護婦に相談したり、指導を受けたりすることは、療養生活を送る上で役立ちますか



看護職による相談活動

- ⑥ 生活の仕方、生活習慣を変えようと思うきっかけとなった。
- ⑦ 療養（介護）生活を送りながらも、したいことができるようになった。
- ⑧ 自分（家族）の病気と付き合っていけるようになった。
- ⑨ その他

これは、患者、家族が自分たちで療養生活を維持、コントロールしていけるようになるために重要と考えた以下の条件（P47 [第1部] 5（1）「患者、家族にとってのメリット」参照）と関連している。

- A 病状の見方、生活の仕方（例えば食事、排泄、運動、保清など）や、医薬品、医療器具の取り扱い方が具体的にわかり、それに関する不安が軽減する。{①②③}
- B 生活全体の中での努力の方向性を見い出していける。{④⑥⑦⑧}
- C 不安や疑問が生じたそのときにどこで相談にのってもらえるかということがわかっており、安心できる。{③⑤}
- D 医療・社会資源に関する情報を得、有効に活用できる。{⑤⑧}
- E 療養し続けている努力を認め合い、励まし合う人間関係がある。{④⑧}

患者（家族）が「役立った」と感じる内容は、療養生活を始めたばかりの時期と継続している時期とで変化するし、またそれぞれが個々にかかえている条件、状況によっても違っているが、過去のことも

表54 役立つ程度別、相談が療養生活上役立った点
(複数回答)

	大いに役立つ	まあ役立つ	計
知識得た・疑問わかった	96 (87.3)	63 (85.1)	159 (86.4)
自分で行う力ついた	90 (81.8)	56 (75.7)	146 (79.3)
相談できる安心感	98 (89.1)	57 (77.0)	155 (84.2)
聴いてくれ落着く	76 (69.1)	31 (41.9)	107 (58.2)
医師と話やすくなった	50 (45.5)	28 (37.8)	78 (42.4)
生活習慣を変えるきっかけ	62 (56.4)	33 (44.6)	95 (51.6)
療養中でもしたいことできる	39 (35.5)	12 (16.2)	51 (27.7)
病気とつきあっていける	62 (56.4)	30 (40.5)	92 (50.0)
その他	14 (12.7)	8 (10.8)	22 (12.0)
不明	1 (0.9)	1 (1.4)	2 (1.1)
回答者数	110 (100.0)	74 (100.0)	184 (100.0)

* ()内の%は各回答者数を回答者数でわった比率である。

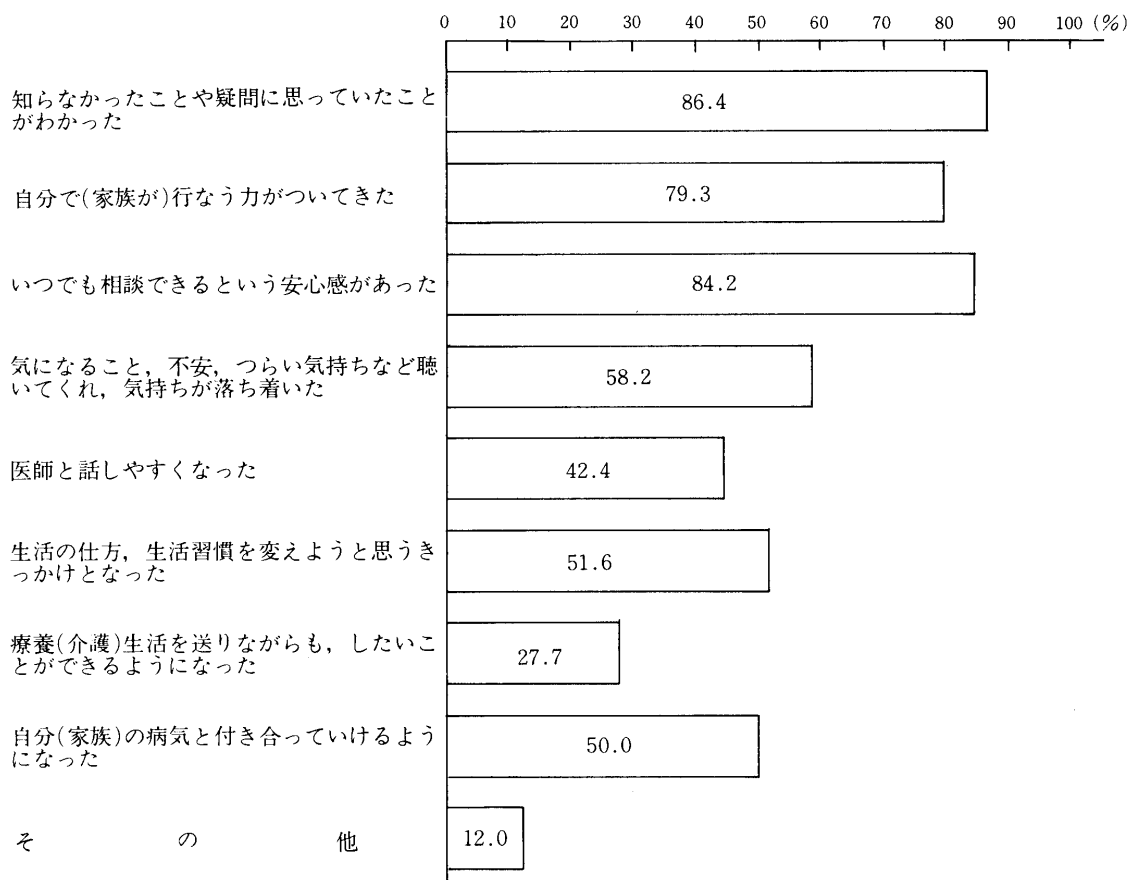
含めてあてはまるものすべてを一応選んでもらった。

一番多かったのは、「知らなかったことや疑問に思っていたことがわかった。」というもので、86.4%の患者があげていた〈図7〉〈表54〉。その内容は、「食事」「安静・運動」「病気」「治療」「病状変化の見方・対処方法」「薬」「医療器具の使用」「酒・たばこ」「介護方法」などと多岐に拡がり、中でも多かったのは、「食事」(78.0%)、「安静・運動」(50.9%)、「病気」(46.5%)だった〈表55〉。

療養生活上役立った内容として二番目に多かったのは、「いつでも相談できるという安心感があった。」(84.2%)であった。慢性疾患患者は療養生活の色々な場面で不安や疑問を感じるが、不安や疑問を持ったその時に、気軽に相談できることを求めており、病院の相談・指導部門の看護職がそのニーズに対応していることがわかる。

三番目は「自分で（家族が）行なう力がついてき

図7 相談・指導が療養生活上役立った点 (複数回答)



た」(79.3%) というもので、その内容も、「食事のコントロール」「安静・運動のコントロール」「病状の把握」「医療器具の使用」「薬・注射の管理」「酒・たばこのコントロール」「医師に上手にかかる」「介護」「福祉制度の利用」などと多岐に拡がり、特に多かったのは「食事のコントロール」(79.5%)であった〈表56〉。

四番目は「気になること、不安、つらい気持ちなど聴いてくれ、気持ちが落ち着いた。」(58.2%)で信頼関係の中で気持ちを整理し、次に立ち向かうための準備を助けられている。

五番目は「生活の仕方、生活習慣を変えようと思うきっかけとなった。」(51.6%)で、セルフケアを動機づけられ、励まされている。以下、「自分(家族)の病気と付き合っていけるようになった。」(50.0%)、「医師と話しやすくなった。」(42.4%)と続いた。看護職は、患者にとって医師との信頼関係が療養生活上重要と考え、その良好な関係の形成を支援することが多い。そのことを感じとった患者(家族)が「医師と話しやすくなった」と答えたものと思われる。

これら療養生活上役立った内容をさらに具体的に自由に話してもらった。その主な内容を患者の声として以下に紹介しよう。選択肢の内容に沿って一応分けてあるが、1人の患者(家族)が多くの内容に

看護職による相談活動

表55 わかったことの内容 (複数回答)

	人数(%)
病 気	74 (46.5)
治 療	49 (30.8)
薬	41 (25.8)
食 事	124 (78.0)
酒・たばこ	22 (13.8)
安 静・運 動	81 (50.9)
医療器具の使用	36 (22.6)
病状変化の見方 ・対処方法	48 (30.2)
介護方法	22 (13.8)
その他	29 (18.2)
計	159* (100.0)

*「知らなかったことや疑問に思っていたことがわかった」
人のみ回答

について話すことも多かったので、大まかな分類となっている。

表56 行う力がついてきた内容 (複数回答)

	人数(%)
病 状 の 把 握	43 (29.5)
食 事 コ ン ト ロ ー ル	116 (79.5)
酒・たばこコントロール	19 (13.0)
安静・運動コントロール	65 (44.5)
薬・注射の管理	28 (19.2)
医療器具の使用	29 (19.9)
医師に上手にかかる	15 (10.3)
介 護	11 (7.5)
福祉制度の利用	9 (6.2)
そ の 他	3 (2.1)
不 明	1 (0.7)
計	146* (100.0)

*「自分で(家族が)行う力がついてきた」人のみ回答。

① 知らなかったことや疑問に思っていることがわかった。

・甘いものが好きでいっぱい食べていた。何をどの位食べるのが良いのかということやカロリー計算方法を説明してもらったことが参考になった。偏食もなくなり、バランスよく食べるようになった。

(糖尿病患者)

・血液及び尿検査のデータの見方とコントロールの仕方を理解できた。(56歳, 男性, 糖尿病)。

・病気, 食事, 薬について説明を受け, 守らなくてはならないことがわかるようになった。(43歳, 女性, 糖尿病)

・食事の栄養バランス, 運動, 一日の生活態度について教わった。病気だということがわかってもどんな風に生活して良いか戸惑う。指導してもらって初めて闘病できる。(60歳, 男性, 糖尿病)

・自分の勝手な判断で食事することもあるので, 思い違いなどが確認される。処方された薬の副作用を心配して悩んでいるとき, 「飲まない場合の害の方が心配」と説明され, 参考になった。(57歳, 女性, 糖尿病)

・白内障と言われて不安になり, 相談した。病気や手術のことも説明してもらい安心した。(41歳, 男性, 糖尿病)

- ・注射針や薬が変わると不安になるが聞くと何でも答えてくれる。食事についても不安な部分があってこういう食べ方してよいのかと聞くと答えてくれる。(糖尿病患者)
- ・注射の仕方を教えてくれた。インスリンが変更になったとき、その疑問を聞いてくれ、説明してくれた。(62歳、女性、糖尿病)
- ・食事のバランスのこと、酸素使用上の注意、どの程度運動したら良いかについて聞いたことが参考になった。(在宅酸素療法患者)
- ・知ることによって、病気に対しての不安が解消される。(在宅酸素療法患者)
- ・水を飲むと体の中をどう流れていくかがわかった。保健相談室は初めてだが、保健婦が若いのにやさしくて感じがよい。(56歳、女性、腎疾患)。
- ・嚥下障害があるので、料理方法、食べ方について話を聞いた。また、手すり、階段などで転ばないよう環境を整備してくれた。(63歳の小脳萎縮症の男性)。
- ・タクシーから降りて最初の一步が踏み出せない状態で、いつ歩けなくなるのかということが心配である。家での生活の仕方や、どの程度運動したら良いか、エレベーターの使い方など教わった。(68歳、女性、パーキンソン病)。
- ・車椅子などの介護用品の情報や入浴時の介護姿勢の他全部について教えてもらった。(74歳のパーキンソン病の男性を介護する妻と娘)。
- ・食事の時の姿勢やフードプロセッサの活用による食事の作り方を教わると共に、市販品の紹介もしてもらい、気が楽になった。(78歳の脳動脈硬化症の母を介護する娘)。
- ・お風呂の入れ方のアドバイスを受けすごく役に立った。(脳梗塞による左半身麻痺の55歳の患者を介護している妻)。
- ・病態の進行に合わせて、便器のあて方や便秘の処置の仕方を教わった。毎週1回の通院時に介護用品の相談もしている。(81歳のパーキンソン病の母を介護する息子)。
- ・負担のかからない立たせ方、おむつのかえ方を教わった。(46歳の神経系疾患患者を介護する妻)
- ・住宅のこと、ヘルパー申請の手続きなどについて聞いた。(46歳の神経系疾患患者)
- ・1週間前に腹痛があり初めて受診し、検査してもらった。今日再び受診したが、自分の体がどうなっているのかわからず不安である。病名を誰に聞けば良いのかもわからなかった。相談室の保健婦から受診した外来に連絡をいれてもらい、再度説明を受けられる様にしてもらったが、うまく聞けなかった。そこで、保健婦から直接医師に聞いてもらって、自分の状態がたいしたことはないことがわかって安心した。今度いつきたら良いのかもわかった。(55歳、男性)

② 自分で(家族が)行なう力がついてきた。

- ・インスリン注射の仕方を教わり、自分で出来るようになった。血糖値も低くで安定している。最近、注射液の目盛りを見てもらっていた妻が、緑内障の手術を受けるために当院に入院したので、自分の

看護職による相談活動

手の操作の感覚で分量がわかるペンシル型注射器の使い方を教わっている。(65歳、男性、糖尿病、当院へ入院するまでは、よく低血糖を起こして入退院を繰り返していた。病棟婦長が退院時心配して保健指導室に依頼。退院後すぐに保健婦が訪問した。インスリン注射のうち方を指導し、早朝の注射のうち方の確認を隣家の潜在看護婦にボランティアで依頼。その後外来でフォローすることにより血糖値も下がり、安定してきた。)

- ・食事や安静・運動のことを最初から教わった。他の病院で入退院を繰り返し、拒食症、鬱状態となったりしていたが、当院に1年前から通い始めた。最初は、死んでも好きなものを食べたほうが良いと思っていた。訪問看護婦に食事のことを習ったので、カロリーと単位のことになった。夫と一緒に献立を作り、それを計算してもらったりした。魚の種類ごとにカロリーを聞いたり、煮野菜と生野菜の違いを聞いたり、細かいことでもわからないことをその都度聞いた。そして、外食してもカロリーを判断出来るようになり、今では、患者会の中でお友達も出来、顔色が良くなって明るくなった。(57歳、女性糖尿病・不安神経症)。
- ・最初、病気の知識、食事療法、運動のこと、注射のうち方など教わり、自己管理出来るようになった。時々コントロールが乱れるが、うまくやれてないことをチェックされ、耳が痛い。でもだから良いのでしょう。(47歳、女性、糖尿病)
- ・横隔膜を動かす練習方法を教えてくれ、腹式呼吸ができるようになった。
- ・腹式呼吸を教わり、出来るようになったので、痰の量が少なくなったし、痰が出てても体の外に良く出せるようになり、体が楽になった。酸素チューブを長くしてもらって、行ったり、来たりがしやすくなった。携帯ポンプの説明もしてくれた。どういう時に抗生物質を使ったら良いか説明してくれわかるようになった。風邪をひいたとき一々受診するのは大変なので、電話で相談するとどうしたら良いかすぐ教えてもらえる。(76歳、男性、在宅酸素療法)
- ・酸素の使い方を教わり、自分の体が楽になった。
- ・病状が把握出来、酸素器具が使えるようになった。
- ・IVH(高カロリー輸液)の操作方法を退院前に一応習っていたが、家でする時はまた色々困ったこともあった。退院直後に来てもらって実際にやる場所を見てもらってやり方を確認していった。その後もやっていてわからないことをその都度保健婦に確認して自分で出来るようになった。また、輸液の管理方法についても冷蔵庫を別にするようなどのアドバイスを受けた。(63歳、女性、人工膀胱・腸閉塞)
- ・最初どういう病気かわからなかったもので、ぎりぎりまで入院させずにいて栄養失調にさせてしまった。その後、病気のことや病状の把握の仕方を教わり、自分でわかるようになった。今は介護にも慣れ、夫や子供たち家族全員でみており、ショートスティも利用したりしているので、特に困ったこともないが、総合相談部の人に「何かあったら電話してください」と言われているので、安心感がある。(81歳のパーキンソン病の母を看病する娘)。

- ・家でI V Hの操作が自分で出来るようになった。(54歳, 男性, 消化器系疾患)

③ いつでも相談できるという安心感があった。

- ・医師への受診は月に一度で, その間に不安がある。わからない時, 困った時にいつでも気軽に相談にのってもらえるので, 安心感がある。(59歳, 女性, 糖尿病, 親族が皆糖尿病)
- ・在宅酸素療法を受けているが, 月に1回, 定期診察のため外来に通うのも大変である。ちょっと具合が悪くなった時, 「こういう状態ですけど」と電話で相談すると, 判断してアドバイスしてくれる。
(在宅酸素療法患者)
- ・家庭において, 眩暈がしたり, 風邪っぽいなど具合の悪い時, 相談が出来るようになりまして, 本当に安心して生活出来るようになりました。(在宅酸素療法患者)
- ・気持ちの支えです。「いつでも(相談して)いいですから」と言ってもらっている。自分の外来通院中に, 母の具合が悪くなって介護しなければならなかった時も, 随分助けてもらった。お付き合いが始まって5~6年たつが, 毎月受診の時, 必ず立ち寄っている。(在宅酸素療法患者)
- ・入院したら, すぐに総合相談部の看護婦から「大変でしたね。」と声をかけられた。「入院した」という情報が, 違う部署にもきちんと回っているということがわかり, とても安心だし, そう言われると気軽に相談できる。治療のことで迷っている時, 看護婦に相談して落ち着いた。リハビリ(家の中の段差やバー), 介護(フローテーションパッド), 身体障害者手帳, 障害年金のことについても話を聞いて参考にした。(60歳のパーキンソン病の妻を介護している夫)
- ・発熱, 便秘など生じてどうしてよいかわからない時, すぐ相談している。(68歳のパーキンソン病の母を介護する娘)。

④ 気になること, 不安, つらい気持ちなど聴いてくれ, 気持ちが落ち着いた。

- ・治すために自分で努力しなければいけないが, 人間甘えがあるので, 他人に頼りたくなる。周りのひとからあたたかい目で見てもらふ必要がある。そのように見てもらって, 自分も食事コントロールをやりだした。(64歳, 男性, 糖尿病)
- ・髪の毛が少なくなったのが気になっていたもので, 尋ねてみたら, カルテ見て病態と一緒に説明してくれた。部屋も看護婦も落ち着いているから聞きやすい。ゆっくり聞けるので安心出来る。自分で悩んでいても答えが出ないが, 話せば, 「それはこういうことではない?」と反応してくれるので, 回答が出てくる。(34歳, 糖尿病, 男性)。
- ・血糖値が上がった時, 保健指導室で「どうして上がったのか」一緒に考えてくれた。いつでも簡単に話を聴いてもらえ, 相談にのってもらえるので, 病院に来るとちょっと寄っていく。(63歳, 女性, 糖尿病)
- ・一時ノイローゼ気味になり, 食事が食べられなくなった。生活の仕方についてアドバイスを受け,

看護職による相談活動

- 「あまり神経質にならなくても良いのでは」と言われて気が楽になった。顔を見ると気軽に声をかけてくれるので、有り難い。(53歳, 女性, 糖尿病)
- ・5年前に糖尿病と診断され、即入院となった。3年ぐらいは、食事療法も実行していたが、この2年ぐらいいろいろと乱れていた。2ヵ月前から当院に通院している。看護婦の話したことは、5年前に学んでいるが、言われたことを思い出し、病気を自覚することとなった。精神的に落ち込んでいる面を包むように対応してくれる。病院のシステムなど何を聞いても明るく親身になって接してくれる。その明るさが何よりの”薬”になる。(40歳男性, 糖尿病)
 - ・精神的に落ち込んでいるとき、他の患者さんの例を話してくれ、「自分だけではない。同じような考えの人がいるのだなあ」とわかり、気持ちが落ち着いた。(66歳, 女性糖尿病・腎疾患・網膜症)
 - ・心配ごとがあれば聴いて答えてくれるし、誰にも言わないことを聴いてくれるので、不安がなくなって安心でき、うれしい。今一番心配なのは人工透析になるのではないかということ、できるだけこのままいきたいのだが。(46歳, 男性, 腎疾患)。
 - ・10年前からクレアチンが高くなって腎不全となった。栄養相談、保健相談に通い、妻も食事指導を受けたが、塩分制限があって食欲が出ないため、食事のコントロールがむずかしい。スポーツや飲酒などしたいことも出来ない。自分の病気のことを聴いてもらって落ち着く。気分的に楽になる。(44歳, 男性, 腎疾患)。
 - ・脳梗塞で入院し、左半身不随となり、何をするのも嫌だった。病棟婦長の紹介で保健婦が入院中から来てくれて、食事、運動のことなど話し、励ましてくれた。独り暮らしのため退院後の生活が不安だったが、相談できる人がいて心強かった。時々何をするのも嫌になることがあるが、保健婦と相談して「やれるところまでやってみよう」と思っている。保健婦に勇気づけられているから頑張っている。このような相談部門は、特に独り暮らしの老人に希望を与える。(66歳, 男性, 脳梗塞・高血圧・糖尿病)。
 - ・わからないことを何でも教えてくれる。嫌なことも聞いてくれる。何より、安心して話ができるのが一番ありがたい。わからないことは、まず、保健指導室の婦長に電話で聞いて相談する。婦長は院内のことを何でも知っている。受診まで1週間あるのに薬がなくなったので婦長に電話したら、準備してくれた。医師の休診日も事前に教えてくれる。(82歳, 女性, リュウマチ・歩行困難, 独居)。
 - ・最初、失明、下半身麻痺の状態入院し、医師からはこのまま治療不能と言われ、以後6年間入院を繰り返し、この間離婚もした。現在は、視力も回復し、一人で歩けるまでになった。入院経験が長いので、何でも自分の方が看護婦より知っている。病棟では、自分のことをきちんとわかっている人はいないので、自分のことを継続的に話す場所として総合相談部がある。自分の思いをぶつけている。その他、福祉に関する情報ももらっている。(33歳の多発性硬化症の男性)。
 - ・病の不安、痛みをわかってくれる。親身になってくれ、一緒に悩んでくれて「頑張ろうね」と言ってくれるので、「一人ではないんだ。一緒に闘ってくれているんだ。」と思える。廊下で会うと看護婦の

方から話かけてくれ、気にかけてくれているので、保健指導室に入りやすい。調子が良い時は今の状態を伝え、調子が悪い時は、精神的不安が大きいので話をすると気持ちがリラックス出来、精神的に安定するので心強い。自分の感覚を大事に人間らしく治療したい。自分が病気をどう受けとめ、これからどうしていくかを家族だけでなく看護婦や医師と一緒に話し合ってくれる。(32歳のリンパ節腫の女性)。

⑤ 医師と話しやすくなった。

- ・現在父が他の病院で癌末期の治療を受けている。患者自身は抗癌剤治療が苦しいので嫌がっているの
で、家族としては、それを止めて丸山ワクチンを飲ませたいが、それを主治医にどう切りだして良い
かわからない。「素人がそんなことを医師に言って良いのだろうか。」ということに相談にのってもら
い、看護婦から「今は話し合いの時代だから」と勇気づけられた。家族としての気持ちを医師に話し
てみる気になった。(64歳の癌末期の父親を心配する娘。娘自身が当院を利用していて信頼している。)
- ・糖尿病に関する病気、食事、運動、生活の仕方など聞き、また、症状が進行した例で驚かされて、糖
尿病を甘くみてはいけないということがわかり、真剣に食事療法などに取り組むようになった。具体
的なことをきちんと教えてもらうことが大事である。電話しても気持ちよく相談に応じてくれる。医
師に何を聞けば良いかもわかるようになった。(51歳、男性、糖尿病)

⑥ 生活の仕方、生活習慣を変えようと思うきっかけとなった。

- ・病気や食事のことなど知らなさすぎた。看護婦の話聞くことによって、それをきちんと知らなくて
はと思うきっかけとなった。実際に教えてくれた。(46歳、女性、糖尿病性網膜症)
- ・カロリー、運動、薬との付き合い方を聞き、自分でやらなければならないという自覚が出てきた。
(58歳、女性、糖尿病)
- ・食事のことなど話をした。意志の弱い部分があるのできちんと守らなければと思っている。糖尿病の
患者会には行って、自分の病気と付き合いなければしょうがないと覚悟を決めた。(64歳、女性、糖
尿病)。
- ・検査結果に基づいて、食事、スポーツのことを話してくれる。わかっているが、出来ない時、そうし
なくてはという気になる。また、何かがあった時に、気軽に相談出来る。(68歳、男性、糖尿病)
- ・食事療法や運動療法について知識はあったが実際実行出来ないし、精神的に憂鬱になってきたので相
談にのってもらった。食事療法などの理屈がわかってきたし、励まされたので、実行出来るよにな
った。(53歳、男性、糖尿病)
- ・食事のことなど見当はついてはいたが、あらためて言われるとなるほどなあとと思う。時々言われるとは
っとして乱れていたのが元に戻る。専門家に言われるほうが真実みがある。(50歳、男性、糖尿病・
心疾患)

看護職による相談活動

- ・保健婦が親切で、正しく、わかりやすい。あまり、熱心なので従わざるを得ない。自分だけでは実行できない。2週間後にきちんとしなければという気持ちで実行している。(55歳、女性)
- ・食事療法のことなど家族が言ってもきかないが、相談室で言われることは、その気になって守るようになってきた。(55歳の糖尿病・心筋梗塞・ストーマの患者を介護する夫)
- ・生活の仕方を変えるように言われていたが、家庭的な問題もあって、やけっぱちの気持ちで仕事に精を出し、仕事をやりとげようという気持ちで打ち込んで来た。仕事中心の生活で外食が多く、時間も不規則で自分自身の食事コントロールが悪いと思っている。血糖値が600mg/100mlになり、肝機能が低下し、自覚症状としても体がだるく、手足のしびれを感じるようになり、今後自分の病気がどうなるのかとても不安である。家庭的な問題も整理したので、役員会にかけて自分の仕事量を減らしたいと思っている。保健指導室には不安になった時電話で相談したり、通院の時に寄ったりしている。(50歳、男性、会社社長、糖尿病、5回目の入院)。
- ・昭和51年に発病し、最初の数年は病気に関する本を自分で買って読んだ。クレアチニンが2mg/dlを超えたとき、本格的に栄養相談に通って自分でメモして大事なことは一通り知っていた。改めて食事のことなど話を聞くと、「じゃやってみようかな」という気になる。保健婦の場合、栄養相談とはまた別で、広い視野から日常生活上の注意を話してくれる。保健相談室では、私が聞かれもしないことをしゃべっていることが多い。(51歳、男性、腎疾患)
- ・「家にばかりいてもよくないでしょうから総合相談部に相談してみてください。」と医師に勧められた。家族の者が言っても本人はその気にならないが、相談部の看護婦に言われると自分で積極的に動くようになった。今、授産所の相談をしている。(脳梗塞により左半身麻痺となった55歳の患者を介護する妻)

⑦ 療養生活を送りながらもしたいことが出来るようになった。

- ・以前には仕事をもっていなかったが、現在は仕事をしながら食事、運動をコントロールして体調を整えられるようになった。(52歳、女性、糖尿病)

⑧ 自分の病気と付き合っていけるようになった。

- ・「肝ちゃん」とは一生付き合っていくしかないと悟っている。自分のことが自分で出来出て歩けるだけでも幸せ。気楽に生活している。病気が表には出ていないけれど、大病なので、精神的には不安である。その不安な気持ちを色々聞いてもらえるので精神的に良い。(60歳、女性、肝硬変・食道静脈瘤・吐血6回)

⑨ その他

- ・同居している娘が入院した時、ホームケア相談室の看護婦が家庭訪問してくれ、紹介してくれたヘル

パーが家の掃除をしてくれ助かった。(白内障, 79歳)

- ・ どのような仕事についたらよいかについて相談にのってもらった。職安にも同行してもらった。また、家の手すり、スロープのことにも相談にのってもらい、福祉サービスの情報も教えてもらって、将来の生活の参考になった。(47歳の脊髄障害の男性)
- ・ 退院後、県の診療所の医師が週1回往診してくれるように整えてくれるなどシステム作りをしてくれた。また、エアマット、ベッドのことを教えてくれ、床ずれがなくなった。(46歳のペーチェット病患者を介護する夫)
- ・ 尿失禁があって受診しようかどうか迷ってついのびのびになっていたが、保健婦に話を聞いて、決心がついた。(73歳, 女性)
- ・ 三ヶ月行かないと、「どうしたんですか?」と連絡してくれるので、ありがたい。行きにくくなっていたけど、また行きやすくなった。病院に行くことによって、自分が糖尿病であることを意識づけられる。(52歳, 男性)

看護職への相談について、患者会・家族会への参加経験のある人の方が、そうでない人に比べてより役立つと答える傾向があった〈表57〉。患者会・家族会への参加経験者は、自分(家族)で自己管理しようという意欲が高いと同時に、共に生きていくということで他の人との関わりを重視する人々で、その分看護職に対する役割期待もより明確な人々と考えられる。そのような人々の約8割が看護職への相談が「大いに役立つ」と評価していることは、看護職の相談・指導の内容が、適切なものであったためと推測される。

また、今回調査では、「保健婦・看護婦に相談したり、指導を受けたりすることは、療養生活を送る上で役立ちますか」という問に対し、「特に関係ない」と答えた患者も4名いた。その理由としては、「いつも言うことが同じようなことばかりでわかっていることばかり」という点が共通していた。また、「保健婦によっては話の仕方によって聞く気になる人とそうでない人がいる。患者の立場になって話してくれる人と、ただ理屈だけの怖い人がいる。」と個々の看護職によって印象が違うことを述べた患者もいた。患者の個性や状態の変化をとらえきれずに対応している場合に、起こりうることを考えられる。

表57 患者会・家族会への参加別、看護職への相談は役立つか

	参加したことあり	参加したことない	計
大いに役立つ	40 (81.6)	70 (50.4)	110 (58.5)
まあ役立つ	9 (18.4)	65 (46.8)	74 (39.4)
特に関係ない	— (—)	4 (2.9)	4 (2.1)
計	49 (100.0)	139 (100.0)	188 (100.0)

4 看護婦への相談と医師への相談との違い

「相談部門の保健婦・看護婦に相談するのと医師へ相談するのとでは、相談内容や相手の対応が違いますか。」という問に対し、60.1%の患者が「違う」と答え、35.1%の患者は「違わない」と答えた。